

## 流通手段の前貸と資本の前貸（下）

久留間 健

はしがき

一 社会的再生産の立場からみた資本の前貸と流通手段の前貸

I 『資本論』第二卷第三篇における流通手段の前貸

II 個別的資本の回転における貨幣資本の二つの側面

III 流通手段の前貸と区別される資本の前貸

IV 本章の結論……（以上・第二十卷第二号所載）

二 『資本論』第三卷第五篇におけるマルクスの諸分析

I マルクスのオーヴァーストーン批判

II マルクスのトウルク・フラートン批判

（1）……（以上・第二十卷第三号所載）

（2）

III 本章の結論

三 スミスにおける流通手段の前貸と資本の前貸との区別

あとがき……（以上・本号所載）

流通手段の前貸と資本の前貸

## (2)

本節の前半では、流通手段と資本との区別に関するトゥーク・フラートン等の見解の批判にあてられている『資本論』第三卷第五篇第二十八章について、簡単にその内容を考察した。そこでまたように二十八章では、主として彼等が流通手段と資本との区別だと主張している諸区別について、それらはけっして流通手段と資本との区別ではないということがのべられているのであって、マルクス自身による流通手段と資本との区別についての積極的な説明は、すくなくとも直接には、みられない。

したがって、二十八章でトゥーク・フラートン等を批判する場合、マルクス自身は、流通手段と資本という概念規定の区別について、これをどのように把えているのか、という問題がなお残っていることになる。

二十八章でマルクスは、トゥーク・フラートン等が、流通手段と資本との本来あるべき区別を、それと無関係なその他の諸問題と混同しているのだとして彼等を批判しているのであれば、二十八章で彼等を批判するさいにマルクスが意識していると考えられる本来の区別はなにかが、なお解決されるべき問題として残っていることになる。

またこれに反して、二十八章でマルクスは、彼等が主張する流通手段と資本という概念規定の対立そのものをも無意味な対立として批判しているのであれば、トゥーク・フラートン等が流通手段と資本という不適當な言葉で表現した諸区別そのものの意味を、それぞれにあきらかにすることが、二十八章の目的だったのだとも考えられるであろう。

これらのことをあきらかにしないかぎり、二十八章についてのわれわれの理解もまた、充分だということはできな

い。というのは、これは、二十八章で流通手段と資本との区別をあつかうさいのマルクスの問題意識にかかわる問題だからである。

すでにこれまでに考察してきたように、三十三章では、社会的再生産の視点から、銀行の前貸に流通手段の前貸と資本の前貸との二つの区別があることがあきらかにされている。そしてマルクスのこのような視点は、二十六章ないし三十二章でのオーヴァーストーン批判のさいにも貫徹されている、と考えられる。したがって、マルクスのこのような視点は当然に、二十八章でのトウーク・フライトン批判のさいにもまた、意識されていると考えるのが自然なように思われる。しかし、二十八章のなかでは、このような視点についてのマルクス自身による説明はなされていないのであるから、このことについては二十八章の内容から推論するほかはないということになる。

この場合、ひとつの手がかりとなるのは、二十八章の冒頭に引用されているトウークおよびキニアの文章である。

二十八章の前半でマルクスは、トウークが商人と商人との間の流通における貨幣と商人と消費者との間の流通における貨幣との区別を、流通手段と資本との区別として主張しているのにたいして「この区別を流通手段と資本との区別に転化させることはまったく間違いである」とのべ、「このいい方は、トウークにあつては、彼が単純に銀行業者の立場に立っていることから来ている」であり、そのために「彼にとっては流通手段と資本との独自の区別が生じるのであるが、しかしこの区別は概念規定そのものの、すくなくともほかならぬトウークによってなされた概念規定とはなんの関係もない」とのべている。

ここでマルクスが「概念規定そのもの」といっているのは、あきらかに流通手段と資本という概念規定の対立をさ

しているものである。したがって、このマルクスの文章は、トゥークが流通手段と資本という概念規定の区別を主張していること自体を批判しているものではなく、むしろ彼が、本来自分自身でおこなっている概念規定の区別を、それと無関係なその他の区別と混同することを批判しているものだと考えられるであろう。

したがって、トゥークが流通手段と資本という概念規定の区別を主張する場合、そのことの本来の意味はどこにあるのかを考察することによって、二十八章でマルクスが流通手段と資本との区別についてどのように把えているのかもまた、あきらかになるのではないかと思われる。

二十八章の冒頭に引用されているトゥークの文章はつぎのものであった。

「銀行業者たちの業務は——要求次第に支払われる約束手形（銀行券）の発行を除外すれば——二つの部門に分割されうるのであって、これは（アダム）スミス博士によって指摘された商人と商人との取引と、商人と消費者との取引との一区別に照応する。銀行業者たちの業務の一方の部門は資本をば、その直接的用途をもたない人々から集めること、およびそれをば、かかる用途をもつ人々に配分または移転することである。他方の部門は、彼等の顧客たちの所得からなる預金を受け入れること、および、顧客たちが彼等の消費目的で支出するために要求するだけの額を払出すことである。前者は資本の流通であり後者は貨幣の流通である。

「前者は一面では資本の集積他面では資本の配分である。後者は（近隣の地方目的のための流通手段の管理）である」。

まえにものべたことだが、トゥークはこの一連の文章のなかで、流通手段と資本との区別の問題として、事実上二つの問題を論じている。

彼が問題としているのは、第一には、銀行の役割についての区別であり、第二には、それに照応するものとされている所得の貨幣形態と資本の貨幣形態との区別である、

この一連の文章のなかでトゥークがおこなっている、流通手段と資本という概念規定の対立が、なんらかの意味を持つているとすれば、それはとくに銀行の役割に関してだと考えられねばならない。

引用文のなかで、トゥークが銀行の役割についてのべているのは、つぎのことである。

銀行は、二つのまったく異なった役割を果している。

第一の役割、資本をその直接的用途をもたない人々から集め、かかる用途をもつ人々に配分または移転すること——この場合には、銀行は資本の集積配分を媒介するものとして機能する。

第二の役割、彼等の顧客たちの所得からなる預金をうけいれ、顧客たちが彼等の消費的で支出するために要求するだけの額を払い出すこと——この場合には、銀行は近隣の地方目的のための流通手段の管理者として機能する。

トゥークは銀行の役割を右のように区別しているのであるが、この場合の彼の本来の問題意識は、流通に必要な貨幣＝通貨の供給者としての銀行の役割を、その他の役割と区別することにあると考えられるのではないだろうか。

貨幣数量説にたつ通貨学派を批判する彼の立場からいえば、流通する貨幣量は商品流通の必要によって規定されているのであり、銀行にたいする通貨需要もまた流通の必要によってのみ規定されていることになる。したがってまた、銀行は流通が必要とする以上の通貨を供給することはありえないということになるのである。

ところが彼は、他方では、銀行にたいする貨幣需要はたんなる通貨需要にとどまらぬことに気付いているのであつ

て、通貨需要と区別されるこのような前貸需要を資本にたいする需要だと考えることによって、銀行の役割は通貨の供給者としての役割と、資本の集積配分者としての役割とに区別されうる、と考えているのではないだろうか。

銀行学派におけるこのような問題意識は、二十八章の冒頭でトゥークとらんで引用されているキニアの文章には、より明確なかたちであらわれている。

「貨幣は、二つの本質的に相異なる操作を行うために使用される。商人と商人との間の交換手段としては、貨幣は、資本の移転が行われるための用具である——すなわち、貨幣でのある一定額の資本と、商品でのある同等額の資本との交換。だが、労賃の支払や商人と消費著との間の売買で支出される貨幣は、資本ではなくて所得である——すべての人々の所得のうち、日常的支出に使われる部分、この貨幣は不断の日常的使用において流通するのであって、げんみつな意味で流通手段と名づけられるのはこれだけである。資本の前貸は、もっぱら銀行その他の資本所有者の意志によって定まる——というのは借手はいつでもあるからである。だが、流通手段の額は、すべての人々の必要によって定まるのであって、この必要の範囲内で貨幣は日常的支出の目的のために流通するのである」。

このキニアの文章でも、トゥークと同じく、二つの問題が相互に結びついたものとして論じられている。

その一つは、商人と商人との間の流通における貨幣と商人と消費著との間の流通における貨幣との区別であり、もう一つは、銀行の役割にかんする区別である。

キニアは、銀行の役割について、つぎの二つのものを区別している。

一 銀行は資本を前貸しするものとしてあらわれる——この場合には、資本にたいする需要はいくらでもあるのだから前貸はもっぱら銀行その他の資本所有者の意志によってきまる。

二 銀行は通貨の供給者としてあらわれる。——この場合には、通貨にたいする需要は流通の必要によってのみ規定されているのであるから、銀行は流通の必要をこえて通貨を供給することはできない。

彼の主張する右の区別には、あきらかに、通貨にたいする需要は銀行政策から独立に、流通の必要によって規定されているが、後者は銀行政策によって左右される——たとえば低金利は事業家たちの借入需要を刺激する——といった事実への認識がよこたわっているように思われる。

この二つの区別についてのべるさいに、彼は銀行にたいする貨幣需要のうち、通貨にたいする需要は流通の必要によって規定されているはずだと考えているのであり、このような問題意識にもとづいて、銀行にたいする通貨需要を、流通の必要によって規定されるのではない、資本にたいする需要と区別しようとしているのである。<sup>(19)</sup>

(19) マルクスは、トゥールクの文章を引用したのち「キニアの方がたたいしい見解にずっと近づいている」とのべて、このキニアの文章を引用している。ここでマルクスがいつている「ずっとたたいしい見解」とは、どのような問題にかんしてのたたいしい見解なのか、それはキニアの文章のうちのどの部分をさしていつているのか、が問題となる。引用されているキニアの見解とトゥールクの見解とをくらべてみると、キニアは、その前半では、トゥールクとおなじく、商人と消費者とのあいだで流通する貨幣は通貨であり、商人と商人とのあいだで流通する貨幣は資本だ、という誤謬をのべているのであるから、マルクスが「ずっとたたいしい見解」として評価しているのは、おそらくキニアが通貨需要と資本需要との区別についてのべている後半の部分ではないかと思われる。もしこのように、マルクスが「ずっとたたいしい見解」といつているのが、流通手段と資本との区別についてのたたいしい見解だと解することができるとすれば、ここでマルクスは、トゥールク・キニアの流通手段と資本との区別にかんする見解には、種々の混乱と同時に、一つの積極的な意味があることを評価していることになる。

もっとも、キニアが「資本の前貸はもっぱら、銀行その他の資本所有者の意志によってきまる——というのは、借手はいつでもあるからだ」とのべているのは、あきらかに誤っている。産業資本の側に、つねにより大きな資本を支配したいという衝動があることは事実であるが、借手がいつでもあるわけでないことは、たとえば恐慌後貨幣資本が大量に遊休している時期

をみればあきらかである。

トウクその他の銀行学派が、銀行の過剰発行の問題をめぐる通貨学派との論争において、とくに強調しているのは、つぎのこと、すなわち、通貨は流通の必要によってのみ流通するのであり、したがってまた流通の必要によってのみ需要されるのであるから、銀行による過剰信用、過剰前貸はありうるとはいえ、銀行による通貨の過剰供給は決してありえないということである。

ここに彼等が、銀行にたいする通貨需要と資本需要とを、またそれに対応して銀行の流通手段の供給者としての役割と資本の供給者としての役割とを区別しようとすることの現実的な意味があるのではないかと思われる。そしてまた、このかぎりでのみ彼等の主張する流通手段と資本という概念規定の対比は現実的な意味をもっているのではないだろうか。

すでに本稿第一章でみたように、マルクスが三十三章でおこなっている区別においては、銀行は再生産にたずさわる資本家自身がおこなわねばならなかった流通手段の前貸を肩代わりするかぎでのみ、流通手段の供給者としてあらわれるのである。このような貨幣需要は、流通空費としての貨幣の流通が必要とされるかぎりでの貨幣需要にほかならないのであって、すでに一定規模の再生産と流通とを前提しているものであり、流通の必要によってのみ規定されている。これに反して、銀行が借手もっていないところの追加資本価値を前貸するさいには、このような需要は究極的には個々の資本の私的所有にもとづく量的限界を突破しようとする衝動にもとづいてるのであって、けっして流通の必要にもとづいてるのではない。

トウクその他の銀行学派が、流通手段と資本との区別を主張するさいの問題意識は、マルクスが流通手段の前貸



と資本の前貸との区別を論じているさいの視点と、基本的には、同じものだと考えられる。

ただ、トウークもキニアも、流通手段と資本との区別について、ひとつの積極的な問題意識から出発しているとはいえず、自分が提起しているこの区別をただしく解決してはいない。そのことは、彼等の見解におけるさまざまな混乱、とくに、彼等がこの区別を商人と消費者とのあいだの流通と商人と商人とのあいだの流通との区別と混同していること、にあらわれている。

このように考えてくると、流通手段と資本との区別にかんする彼等の混乱は、彼等自身が問題として提起した概念規定の区別をその他の諸区別と混同するところから生じるのであるから、二十八章では、彼等が流通手段の前貸と資本の前貸との本来の区別にその他の異質的な諸区別を混入させることによって生じている、彼等の見解における諸混乱を批判することが主眼とされているのだ、と考えられるであらう。またこう考えてはじめて、二十八章におけるこれらの批判の内容もまた、充分理解されうるのではないだろうか。

すでにみたように、二十八章の前半——トウークの見解にたいする批判の部分——では、かれらが流通手段と資本との区別だと主張している、商人と消費著とのあいだの流通における貨幣と、商人と商人とのあいだの流通における貨幣との区別は、じつは所得の貨幣形態と資本の貨幣形態との区別なのであって、けっして流通手段と資本との区別ではないことがあきらかにされ、また、なぜかれらがこのような混同におちいったかについての分析がなされているのである。

ここでこのような視点から、ふたたびマルクスのトウーク批判をかんたんにふりかえってみることにしよう。

一 商人と商人との取引においては、流通はもっぱら信用で媒介され、したがって貨幣はもっぱら支払手段として

機能する、したがってこの場合には、現実の銀行券流通なしに流通が媒介されるか、あるいは銀行券の流通を必要としても、その流通は一時的なものにすぎない。これに反して、商人と消費著との取引においては、貨幣はもっぱら購買手段として流通するのであって、とくに鑄貨あるいは銀行券——小額銀行券——の流通が必要とされる。この事情が、銀行業著の立場に立つトゥークにとっては、両者の区別を流通手段と資本との区別と混同するひとつの原因となる、というのは、彼は偏狭な銀行業者的立場から、その前貸がたんなる銀行券の増発によって媒介される場合のみ、銀行は通貨を前貸するのだと考えているからである。

二 トゥークは商人と消費者とのあいだに流通する貨幣のみを流通手段だと主張し、銀行はこのような貨幣の供給者としてのみ流通手段の供給者としてあらわれるのだ、と考えている。マルクスはこれにたいして、流通に必要な貨幣量は、どちらか一方の流通によってではなく、全体としての商品流通の必要によって規定されているのだ、ということをあきらかにしてかれらの混乱を批判している。<sup>(20)</sup>

(20) トゥークが、商人と消費者とのあいだで流通する貨幣のみを流通手段だと主張する背後にはスミスの $v+m$ のドグマが横たわっている。彼はスミスの $v+m$ をうけつぐことにより、商人と消費者とのあいだの流通に必要な貨幣量は、結局全商品流通のためにも充分なはずだ、とかがえているのである。

『資本論』第二巻第三篇では、スミスの $v+m$ のドグマを批判することがひとつの主眼とされているのであるが、その二十章十三節で、マルクスはつぎのようにのべている。

『すでにみたごとくA・スミスにあっては、社会的生産物価値の全体が収入すなわち $v+m$ に分解され、したがって不変資本価値はゼロだとされる。だから必然的に、年収入の流通に必要な貨幣は年生産全体の流通のためにも充分だということになる、……これが事実上A・スミスの見解であって、それがT・トゥークによってくり返される』（『資本論』第二巻四九〇頁）。

また『剰余価値学説史』第一巻第四章「生産的および不生産的労働」のところでは、このことについてつぎのようにのべている。

「だから商人と商人とのあいだの取引は、商人と消費者とのあいだの取引に等しくなければならぬという、A・スミスの命題はあやまりである。この命題は、総生産物が収入に分解するというスミスのあやまった命題にもとづくのであって、事実上、商品交換のうち資本と収入との交換にひとしい部分は諸商品の交換全体にひとしい、ということにはかならない。だからこの命題と同じく、トゥークが貨幣流通（特に、商人のあいだで流通する貨幣量と、商人と消費者とのあいだで流通する貨幣量との関係）についてこの命題のうえに立てた応用論も、あやまりである」（『剰余価値学説史』全集版第一巻二二二頁）。

三 彼等は、以上のような諸混同にもとづいて、とくに好況期における貨幣需要と逼迫期における貨幣需要との區別を、流通手段にたいする需要と資本にたいする需要との區別に転化するものであるが、これにたいして、恐慌期には、とくに資本の流通に必要とされる貨幣量が増大し、労賃支出のために必要とされる貨幣量は減少するのであるが、後者の減少より前者の増大が大になれば、全体として必要な通貨量は増大しうる。したがって流通手段にたいする需要はけっして好況期の特徴ではなく、両時期における貨幣需要の區別はけっして流通手段と資本との區別ではない。

以上、冒頭のトゥーク・キニアの見解についてのマルクスの批判は、もっぱら本来彼等が提起した區別にはいりこんでいる種々の混乱にたいしてなされているのであって、けっして彼等が流通手段と資本との區別を主張したこと自体にむけられているのではない。二十八章の前半ではむしろ、彼らが流通手段と資本との區別をみずから提起しているにもかかわらず、なにゆえに混乱したのが解明されているのだ、と考えられるであらう。

つぎに、二十八章の途中で引用されているフラートンの見解であるが、ここでも、流通手段と資本との區別を問題にするさいの彼の問題意識は、トゥークおよびキニアのそれと究極的には同一のものだと思われる。

彼はつぎのようにのべていた。

「貨幣融通にたいする（すなわち資本の貸付にたいする）需要は追加的流通手段にたいする需要と同一であると考ええることはもちろん、両者はしばしば結びついていると考えることさえも、実は大きな誤りである。どちらの需要も、特にそれ自身を左右する・そして相互にまったく相異なる・諸事情をその原因とする。」

ここで彼が本来の問題として意識しているのは、銀行にたいする通貨需要を、その他の貨幣需要から区別することである。彼は、トゥーク・キニア等と同じく、通貨にたいする需要は流通の必要によって規定されているはずだとかんがえ、このような通貨需要にたいして、それ以外の貨幣需要を資本にたいする需要として区別しようとしているのである。

しかし、この区別について、フラートンもまた、本質的にはトゥークとおなじ混乱におちいつている。

すなわち彼は、流通手段と資本とを区別するさいに、通貨にたいする需要を銀行券流通にたいする需要としてのみ解するのであって、銀行券流通高の増大がある場合にのみ、流通手段にたいする追加的需要があったのだとかんがえ、これを貸付資本にたいする需要と対比させているのである。

この場合、フラートン本来の問題意識が、流通の必要にもとづく通貨需要と流通の必要の反映ではない資本需要とを区別することにあるのだとすれば、この区別は——すでに本稿でみてきたように——銀行券流通にたいする需要と、銀行前貸にたいする需要との対比としてではなく、銀行にたいする前貸需要そのものにおける区別として扱われねばならなかったのである。<sup>(21)</sup>

(21) フラートンは、ここでの引用文のなかでは、銀行券流通高の増大を結果する場合にのみ流通手段にたいする追加的需要が

あったのだ、と考えているのであるが『通貨調節論』の他の箇所ではつぎのようにもべている。

「わたくしの考えでは、いかなる文明社会においても流通手段——その形態の如何をとわず——の供給量はそれらの介入を必要とする一切の交換または支払の取引を円滑に遂行するに足るものであるべきこと。この限度まではいかなる個人といえども、等価物を払うか担保を提供するかしうる限り、かかる流通手段を自由になしうべきであるということ、しかしまた、これらの限度が守られる以上、流通手段の供給過剰というような事実はありえぬということ、——等々の諸点は一般に容認されるところであろう」（『通貨調節論』阿野秀房訳一〇四頁）。

このかぎりでは、彼は、等価物またはたしかな担保物を提供しうるかぎり、銀行にたいする貨幣需要は流通の必要にもとずくものだ、と考えていることになる。

したがって、フラートン批判においてもマルクスの問題意識は、彼がおこなっている流通手段と資本との区別には、本来の区別とことなるどのような諸問題が混入することによって混乱が生じているのか、をあきらかにすることにあると考えられるのではないだろうか。

このような視点から、ふたたび、マルクスのフラートン批判をふりかえってみることにしよう。

フラートンは、引用文のなかで、好況期における貨幣需要と恐慌期における貨幣需要との区別を、とくに流通手段にたいする需要と資本にたいする需要との区別としてあげているのであるが、マルクスはこれにたいして、恐慌期においても流通手段の必要量はかならずしも減少しないこと、したがって両時期の区別を流通手段にたいする需要と資本にたいする需要との区別に転化することは誤りであることをふたたびのべて、彼の混乱を批判している。

つぎにマルクスは、イングランド銀行手持の有価証券が、その銀行券流通高と逆に変動するという事実は、いかなる銀行もその顧客の需要をこえてその銀行券発行高を増加することは出来ぬということの例証であり、もし銀行がこの額をこえて前貸をしようとするならば、銀行はこの前貸を自行の資本からなさねばならぬ、というフラートンの主

張にたいする批判にうつっている。

これにたいしてマルクスは、フラートンは、ここでは資本という言葉をとんなる銀行者の意味でのみ——銀行業者は自分のたんなる信用よりもおおくのものを貸付けることを余儀なくされているという意味でのみ——用いているのだ、と批判をしている。

ここでとくに注意せねばならないのは、銀行業者の立場からみて、その前貸が自分の資本からなされるかどうかという問題、すなわち、銀行はいかなる範囲でたんなるその信用にもとずいて前貸を拡張しうるか、またその前貸はいかなる場合にその銀行の準備にはねかえって来るのかという問題は、それ自体としては、ひとつのきわめて現実的なまた重要な問題だということである。したがって、銀行業者の立場にたつて資本という言葉を用いることは、それ自体としては、けつして批判さるべきことではないのであるから、ここでのマルクスの批判は、たんにフラートンが銀行の立場にたつて資本という言葉を用いていることにむけられているのではない。

したがって、ここでのマルクスの批判は、フラートンが本来問題としている流通手段の前貸と資本の前貸との区別は、たんなる銀行業者の立場からは論じられぬ問題であるのに、彼がこの区別を、銀行業者の立場からみて資本の前貸かどうか、という区別に転化していることにたいしてなされているのだ、と考えねばならないだろう。したがってここでもマルクスの批判は、フラートンが流通手段と資本との本来の区別にひとつの異質的な問題を混入させていることにたいしてなされているのだ、と考えられる。

マルクスは、このように、フラートンはこの場合には銀行業者の立場から資本という言葉を用いている、として彼を批判したのち、フラートンが自分の見解の例証として重視している現象——イングランド銀行の前貸が増大するさ

いに、その銀行券流通高が減少するという現象——について、この場合いかにしてその銀行券は同行に還流するか、という問題を設定し、一、兌換による還流、二、預金による還流、三、返済による還流の三つの場合について説明をしている。

つぎにマルクスは「さて、Aにたいする銀行の前貸は、どの範囲で資本の前貸とみなされ、またどの範囲でたんなる支払手段の前貸とみなされるべきであるか？」（『資本論』第三卷四九七頁）という問題を設定している。

この設問の意味は、すでにのべたように、いかなる場合にその前貸は銀行にとっての資本の前貸を意味するか、ということだと考えられる。

すでにみたように、マルクスは、たんなる銀行業者の立場から資本という言葉を用いているとフラートンを批判したのちに、この設問においては、自分自身フラートンとおなじ立場から資本という言葉を用いているのである。これはどのように理解されるべきだろうか。

さきにみたように、フラートンは、流通手段の前貸と資本の前貸との区別を、銀行の立場からみての資本の前貸かどうかという区別と混同しているのであるから、ここでのマルクスの設問の意図は、銀行の立場からみて資本の前貸かどうかという区別の内容をあきらかにすることによって、同時に、この場合対立するのはけっして流通手段と資本ではないことをあきらかにすることにあるのだ、と考えられるのではないだろうか。

マルクスは、この設問について論じたのちに、つぎのようにのべている。「貨幣融通にたいするこの需要が資本にたいする需要であるかぎりでは、それは貨幣資本、銀行業者の立場から見ての資本を求める需要、すなわち金——外国への企派出のばあい——または国立銀行の銀行券を求める需要たるにとどまるのであって、——国立銀行券は、私

営銀行にとつては等価物とひきかえに買うことによつてのみ得られるものであり、したがって私営銀行にとつては資本を表示する」(『資本論』第三卷五〇〇頁)。

この場合、銀行の前貸にたいする需要が、同時に金にたいする需要を意味するかぎりでは、対立するのは国内的流通手段としての貨幣と國際的支払手段としての貨幣である。この対立をフラートンは、銀行の立場にたつことによつて、流通手段と資本との対立と考えるのである。中央銀行は、国内通貨の供給者としての役割を持つと同時に、國際的支払手段たる金の供給者としての役割をも持つてゐるのであるから、たえず確實な手形にたいしてその前貸を行うと想定された場合にすら、必要なかぎりでは、世界貨幣としての金の供給者としてもあらわれねばならないであらう。そのかぎりでは、いずれの場合にも、資本の形態が問題なのであつて、対立するのは、たんなる貨幣の形態規定性の區別にすぎない。

また、私的銀行にとつて、その前貸需要がイングランド銀行券にたいする需要を意味するかどうか、という區別、たとえば地方發券銀行の銀行券が、その地方的流通の範圍をこえることによつて、それにたいしてイングランド銀行券が求められるような場合にも、対立するのは流通する貨幣の形態にすぎないのであり、これらの區別は、けつして、フラートンの主張するように、流通手段と資本との區別ではないのである。

このように、フラートンの通貨の前貸と資本の前貸との區別には、彼の銀行業者的な立場から、ひとつの異質的な問題が混入していることを批判したのちに、マルクスはフラートンが自分の見解の例証としてあげてゐる現象、流通手段の總量が減少する時期にイングランド銀行が担保として保有する有価証券の分量が増大するという現象、について「かかる事情はきわめて簡単に説明される」「この總量は、かかる逼迫期には二重の仕方で制限される」(『資



本論』第三卷五〇一頁）として、(一)金の流出、(二)たんなる支払手段としての貨幣にたいする需要——の二つをあげている。

ここでのマルクスの分析は、フラートンが、その銀行業者的立場とむすびついて、銀行券流通高の増大を伴う貨幣需要のみを流通手段にたいする需要だと考えていることにたいする、最終的批判をなしているのだと考えられる。

フラートンは、銀行券流通高の増大があるかぎりで流通手段にたいする追加的需要があつたのだ、と考えるのであるから、逼迫期には、イングラスド銀行手持の有価証券が増大するにもかかわらず、銀行券流通高は減少するという事情から、逼迫期の貨幣需要は流通手段にたいする需要ではなく資本にたいする需要だ、と結論しているのである。

なるほどイングランド銀行の前貸が増大するにもかかわらず、その銀行券流通高が減少するとすれば、それは、銀行券流通にたいする需要は銀行信用にたいする需要とは異なる、ということの意味するにはちがいない。イングランド銀行がいくらその前貸を拡張しても、銀行券は必要以上には流通しないのであり、必要がなければ還流するということはまったく正しい。

フラートンが強調するこの区別——銀行信用にたいする需要と銀行券流通にたいする需要との区別——もまた、ひとつの重要な区別であり、イングランド銀行の前貸の増大を、その銀行券流通高の増大と同一視する通貨学派にたいする批判としても正当である。

しかし、彼がこれを流通手段の前貸と資本の前貸との区別の問題としてとらえ、銀行券流通高の増大があつた場合にのみ、流通手段の前貸にたいする追加需要があつたのだと考え、それをこえる前貸を、流通の必要によって規定されているのではない資本の前貸だ、と考えているのは誤っている。

第一に、フラートンがとくに重視している逼迫期には、國際的最終支払手段としての金が需要されるのであるが、この場合の対立は、世界貨幣としての金と国内通貨との対立であり、けつして資本と流通手段との対立ではない。

また第二に、逼迫期にはとくに支払手段としての貨幣にたいする需要が特徴的なのであるが、この購買手段と支払手段との区別もまた、けつして流通手段と資本との区別ではない。たとえば、労賃支払いに必要とされる銀行券は比較的ながく流通に——銀行外に——とどまるが、過去の取引の決済のために必要とされる銀行券の流通は一時的にすぎないという事情は、両者とも流通の必要にもとづく通貨需要だ、ということ否定するものではないからである。

フラートンは、銀行券流通高の減少を、ただちに、流通手段の前貸にたいする需要の減少と同一視するのであるが、銀行券流通高の増減と、個々の前貸において需要されるものが流通手段なのか資本なのか、という問題とはまったくことなる問題である。たとえば、一枚のイングランド銀行券が、預金あるいは返済による還流を媒介にして、その五倍の手形割引を媒介するとすれば、その間に、その一枚の銀行券はその五倍の通貨需要をみたすことができるのであり、このことは、その五度の貨幣需要がすべて流通手段にたいする需要だったということを否定するものではないからである。

マルクスは、このように、逼迫期にはイングランド銀行手持の有価証券が増大するのに、その銀行券流通高が減少する、という事情を(一)金の流出・(二)支払手段としての貨幣にたいする需要、の二つの事情によって説明したのち、この現象にもとづいて、逼迫期における貨幣需要は流通手段にたいする需要ではなく資本にたいする需要だと主張するフラートンの見解についての批判をつぎの文章でおわっている。

「だが、フラートンが、購買手段としての貨幣と支払手段としての貨幣との区別を、流通手段と資本との誤った区

別に転化しているということはあきらかである。しかもその基礎には、またしても、流通手段に関する偏狭な銀行業者的表象が横たわっているのである」(『資本論』第三卷五〇二頁)。

以上簡単にみたように、トワーク・フライトン等は、流通手段の前貸と資本の前貸との区別、あるいはまた、これに対応する流通手段にたいする需要と資本にたいする需要との区別の問題を、ひとつの現実問題として提起しながら、結局この区別をその他の諸区別と混同することによって種々の混乱におちいつているのであって、二十八章では、彼等のこのような混同にたいして批判がなされているのだと考えられる。

すでにのべたように、彼等が流通手段と資本との区別の必要を主張するのは、銀行にたいする貨幣需要のうち、流通の必要にもとづいている通貨需要を資本にたいする需要と区別しようとするところにある。彼等は、流通する貨幣の量は商品流通の必要によって規定されているのであり、したがって銀行にたいする通貨需要も流通の必要によって規定されているのであるから、銀行は通貨の過剰供給をおこなうことはありえないのであって、銀行による通貨の供給もまた、ピール銀行条例のように、流通の必要と無関係な、外部的な基準によって制限されるべきではない、と考えているのである。

こう考えてくると、三十三章で社会的再生産の立場からマルクスがあきらかにしている区別こそ、彼等が本来問題としながら、その他の諸問題との混同によって混乱しているところの流通手段と資本との本来あるべき区別だと考えられるのではないだろうか。

なお二十八章の最後に、マルクスはつぎのような設問をおこなっている。

「なお、つぎのような質問が生じうる。いったい、かかる逼迫期に欠けているのはなんであるか？資本であるか、

流通手段の前貸と資本の前貸

それとも支払手段としての規定性をもつ貨幣であるか？」。

この設問は、すでにたんなる流通手段と資本との区別の問題をこえる問題である。なぜならば、ここで問題とされているのは逼迫期の貨幣需要の性格規定の問題なのであり、マルクスは二十八章でのトゥーク・フラートン批判を通して、逼迫期における貨幣需要の特殊性は、けっして流通手段と資本との区別によっては解決できぬことをあきらかにしているのだからである。

この問題はむしろ「現実資本と貨幣資本」の章において論じられるべき問題なのであって、マルクスは、二十八章を、右の設問についてのつぎのような文章によって終っている。

「かくして、いずれにしても、逼迫の原因は商品資本の欠乏ではない。この問題には後段で立ちかえろう」（『資本論』第三卷五〇三頁）。

### Ⅲ 本章の結論

以上で、『資本論』第三卷第五篇における、マルクスのオーヴァーストーン批判およびトゥーク・フラートン批判について簡単に考察した。

二十六章と三十二章の一部におけるオーヴァーストーン批判においてマルクスがあきらかにしている区別——借手がその資本の将来の貨幣形態を得るのか、あるいはそれ迄持つていなかった追加的価値を得るのかという区別——は、三十三章で社会的再生産の視点からあきらかにされている流通手段の前貸と資本の前貸との区別と一致すると考えられる。また、二十八章でトゥーク・フラートン批判のさいにも、マルクス自身はそのことを明言してはいないの

であるが、そこで流通手段の前貸と資本の前貸という概念規定の区別として意識されているのは、やはり三十三章で  
の社会的再生産の立場からの区別にはかならないと考えられる。

銀行が前貸しするものはなにか、という問題に関する第三巻第五篇での諸分析において、前貸されるものが流通手段なのか資本なのか、という概念規定が問題であるかぎりでは、マルクスの視点はつねに一貫しているのであり、それは社会的再生産の視点なのだ、と考えられるのではないだろうか。

流通手段の前貸と資本の前貸という区別がひとつの現実問題として意味をもち、流通手段の前貸が、銀行の前貸のうちで独自の規定をもつものとして考察されねばならぬのは、銀行は社会的な流通に必要とされる流通手段の供給者としての社会的な役割をもっている、ということにもとづいている。流通手段の必要は商品流通によって規定されているのであるから、流通手段の供給者としては、銀行はたんなる受動的な役割を果すにすぎないのであって、あらたに再生産過程で機能すべき資本価値を供給することはあり得ない。

すでに『資本論』第一巻第三章であきらかにされているように、商品流通の変動に応じて、すなわち流通する商品量の変動か、あるいは商品流通の速度の変動か、あるいは商品価格の変動に応じて、流通に必要な貨幣量も変動する。したがってまた、流通に必要な貨幣量の変動に応じて、必要とされる流通手段があるいは外部から追加的に供給され、あるいは流通から排除されねばならない。

銀行が社会的空費として必要とされる流通手段の供給者としてあらわれる場合に、どのようにしてこのような需要が満たされるのかは、ひとつの解決されるべき現実問題である、しかしこの問題は、じつは、信用制度が問題とされる以前に、社会的再生産と流通についての分析において解決されているのである。信用制度が成立する以前にも、流

通に必要な貨幣がいかにして供給されるか、という同じ問題がすでに存在しているのであるから、この問題はむしろ社会的再生産と流通の分析において基本的に解決されるべき問題なのであり、信用制度が発達するときには、再生産にたずさわる資本家自身がおこなわねばならなかった流通手段の前貸が、たんに銀行によって肩代りされるにすぎないのである。したがって三卷五篇三十三章では、社会的再生産についての分析を指示するだけで充分だったのである。

すでにみたように、オーヴァーストーンによって代表される通貨学派には、流通手段と資本との区別に関する問題意識すら存在しない。これにたいして、トゥーク・フライトンによって代表される銀行学派には、種々の混乱があるとはいえ、両者の区別に関する一つの積極的な問題意識が存在する。この両者の相異は、ビール銀行条例をめぐる論争での両者の立場と密接にむすびついている、と考えられるであろう。

オーヴァーストーンにあつては、両者の区別に関する意識がはじめから存在しないのであるから、彼は、事實上、銀行は資本を前貸すると同時に、流通手段を供給するのだとも考えていることになる。すなわち、彼は銀行が前貸するのはつねに貨幣だということによって両者を同一視しているのである。彼は、貨幣資本にたいする需要を現実資本にたいする需要と同一視するのであるが、同時に、銀行は、その前貸においてつねに流通手段を供給するのだ、と考える。したがって、銀行前貸の増大はすべて物価変動の要因と考えられ、しかもそれが、流通手段の過剰供給ということによって説明されることになる。

資本の前貸を流通手段の前貸と混同することは、貨幣数量説におちいることを意味する。流通手段の前貸にたいする需要は、流通の必要にもとづくのにたいし、資本前貸にたいする需要は、けっして商品流通の必要によって規定さ

れているのではない。たとえば、ある資本家が、企業拡張あるいは新投資のための追加資本を需要するとしても、このような需要はけつして商品流通の媒介に必要な貨幣量の増大を反映しているわけではない。彼はただ、将来の見込みと有利な借入条件との比較にもとづいて、あるいはまた競争の強制法則にもとづいて、その企業拡張の計画をたてたのである。

もしこの場合、銀行は流通手段を前貸しするのだというならば、この場合には、流通の必要と無関係に一方的に流通手段が供給されるのであり、流通手段の過剰供給がおこなわれるのだ、という結論が生じることになるだろう。

この場合には、流通手段が前貸されたのではなく、再生産過程であらたに資本として機能すべき貨幣資本が前貸されたのである。この前貸によつては、流通手段のあらたな供給が媒介されたのではなく、あらたな資本の投下が媒介されたのだ、と考えるべきであらう。なるほど、この場合にも前貸されたのは貨幣であり、その貨幣片そのものは、必要があるかぎりでは流通をつづける。しかしこの貨幣片の流通は、あらたな資本投下の結果としてにすぎないのであって、その貨幣片が流通手段としての規定を獲得するのは、やっと対応する商品販売者の手に移ってからであらう。この場合、この貨幣片が流通するのは、あらたな資本投下が商品の姿態変換のあらたな一系列を規定するかぎりでのことにすぎない。

通貨学派にたいして、銀行学派においては、流通する貨幣量は商品流通の必要によつて規定されているのであり、流通手段の量はけつして商品価格の変動の原因ではない、という明白な意識がある。したがって、彼等は銀行にたいする通貨需要は流通の必要によつて規定されているのであり、銀行はけつして流通手段の過剰供給を行うことはありえない、と主張する。

ここに、彼らが流通手段にたいする需要と資本にたいする需要とを区別しようとしたことの積極的な意味があるのだと考えられる。

ただ彼等は、すでにみたように、この区別をさまざまなその他の諸区別と混同することによって混乱におち入っているのであるが、彼等がこの概念規定の区別を問題として意識していたということは、オーヴァーストーンにたいする彼等の理論的優越を示しているのだと考えねばなるまい。

なお、二十六章・二十八章におけるマルクスの分析を考察するさいに、そのうちに挿入されているエンゲルスの説明をわざと除外しておいた。というのは、そこでのマルクスの論理を忠実にたどるためには、さしあたりエンゲルスの挿入文をのぞいて考察した方がよいと考えたためである。

ここで、二十六章と二十八章に挿入されているエンゲルスの説明についてもなお簡単に考察しておくことにしよう。

二十六章でマルクスが、オーヴァーストーンの見解の批判を通して、資本借用と割引との間の区別についてのべているところに、エンゲルスは「私——編纂者——はここにあって一つの注意をさし挿んでおく」（『資本編』第三卷四六七頁）とのべて、流通手段の前貸と資本の前貸との区別についての説明をおこなっている。

ここでエンゲルスは、この両者の区別を、その前貸によって借手が追加資本を得るかどうか、という視点から説明しているのであり、マルクスは三十二章でもまた三十三章でも同じ区別についてのべているとして、三十三章の「信用業が発展して貨幣が銀行の手に集積すれば、銀行こそは、すくなくとも名目的には、貨幣を前貸するものである。この前貸は、流通内にある貨幣にのみ関連する。それは流通手段の前貸であって、これによって流通させられる諸資



本の「前貸ではない」という例の一節を引用している。

すなわち、エンゲルスは、三十三章でマルクスがおこなっている社会的再生産の立場からの区別と、二十五章ないし三十二章でマルクスが、オーヴァーストーン批判を通じてあきらかにしている手形割引と資本前貸との間の区別とは、同一の区別だと考えているのである。

本稿でのわたくしの結論は、このかぎりでは、エンゲルスの見解と同じなのであって、本稿ではエンゲルスがすでに述べていることをあらためて考察したにすぎないことになる。

また二十八章で、マルクスがフライトン批判に関連して「さて、Aにたいする銀行の前貸は、どの範囲で資本の前貸とみなされ、またどの範囲でたんなる支払手段の前貸とみなされるべきか？」『資本論』第三卷四九七頁」と設問しているところで、エンゲルスは「ここにつづく原文の文章は関聯が理解しがたいので、括弧内のおわりまでは編纂者があらたに書きかえたものである」として、二十六章での説明と同じく、借手がその前貸によって追加資本を得るかどうか、という視点からの分類をおこなっている。

これについて三宅教授は、ここでのマルクスの設問では、資本という言葉はフライトンが用いているのと同じように、銀行にとつての資本という意味で用いられているのであるから、このようなマルクスの設問にたいしてエンゲルスが、借手が追加資本を入手するかどうかという視点から説明をしているのは見当はずれである、と指摘されている。

（『貨幣信用論』研究四五〇頁参照）。

三宅教授が指摘されているように、ここでのマルクスの設問は、いかなる場合に、銀行業者の立場から、その前貸は資本の前貸を意味するのか、という意味だと考えられるのであり、またエンゲルスの挿入文をぬかして読んでみる

と、そのあとにつづくマルクスの考察は、このような設問についてのものであることがわかるのであるから、このかぎりでは、三宅教授が指摘されているように、ここでのエンゲルスの説明はまったく見当はずれだ、ということになるだろう。

しかし、ここでのエンゲルスの説明は、フラートンが流通手段の前貸と資本の前貸との区別を、銀行の立場からみての資本の前貸かどうか、という区別と混同していることにたいして、流通手段の前貸と資本の前貸との区別は、フラートンのように銀行業者の立場からでなく、借手が追加資本を得るかどうか、という視点からなされねばならぬということを描しているかぎりでは、評価されるべきではないだろうか。

ただ、借手がいかなる場合に追加資本を得ることになるか、ということについてのエンゲルスの説明の内容をみると、そこでの彼の説明はあまりにも形式的にすぎるのではないか、という疑問が生じる。

エンゲルスはそこで、前貸を一、なんらの担保もなしに、その個人的信用によつて前貸がなされる場合、二、有価証券、すなわち国債または株式等を担保として前貸がなされる場合、三、手形割引の場合、の三つの場合にわけて考察し、一の場合にのみ、借手は追加資本を受取るのであって、資本の前貸を意味するのだ、と結論している。

すでにのべたように、借手が彼の資本の将来の貨幣形態をうけとるにすぎないのか、あるいは追加資本をうけとるのか、という区別は、本来社会的再生産との関連においてとりあつかわれるべき問題なのであって、これをエンゲルスのように、たんなる前貸の形式のみから考察することは、流通手段の前貸と資本の前貸との区別に関する本来の意味を失わせてしまうことになるのではないかと思われる。

借手のもっている資本の予定された貨幣形態の先取を意味するかぎりでは、その前貸は流通手段の前貸だと考えられ

るのであるから、たんなる個人的信用にもとづいて前貸がおこなわれる場合にすら、その前貸の範囲が借手の資本のうち、すでに流通過程にあってその貨幣形態での還流が予定されている資本部分にとどまり、その返済が、事実上、この資本部分の予定された還流によって裏づけられているかぎりでは、その前貸は流通手段の前貸だと考えられるのではないだろうか、また担保前貸のさいにも、借手が、事実上、彼の資本の予定された貨幣形態への還流に先立って追加的に投下せねばならない貨幣資本をこえて、再生産過程に追加的に投下される資本価値をうけとると考えられる場合には、その前貸は資本の前貸だと考えられるのではないだろうか。

以上で、『資本論』第三卷第五篇の諸所でなされている流通手段の前貸と資本の前貸との区別にかんする諸分析の考察をおわるのであるが、ここでその結論を簡単に整理しておくことにしよう。

第三卷第五篇においては、諸所で、銀行の前貸するものとはなにか、という問題についての分析がなされている。銀行が前貸するものとはなにか、という問題は、種々の視点から考察されうるものであり、『資本論』でも、さまざまの立場からの分析がおこなわれている。また、資本という言葉は種々の視点から規定されうるものであって、すでに三宅教授が指摘されているように、『資本論』でも諸々の視点からの分析がなされている。

しかし、流通手段の前貸が資本の前貸かという区別が問題とされているかぎりでは、第三卷第五篇の諸々の箇所での諸分析においても、一貫したひとつの区別が問題とされているのではないかと思われる。この区別は、たんなる銀行業者の立場からでもなく、またたんなる個別資本の意識からでもなく、究極的には、社会的再生産の視点からのみあきらかにされるべき区別なのであって、マルクスは、この区別について三十三章で最終的に、社会的再生産の視点からの説明をおこなっているのだと考えられる。

### 三 スミスにおける流通手段の前貸と資本の前貸との区別

前節まで、流通手段の前貸と資本の前貸との区別に関するマルクスの諸分析についての考察をおわったのであるが、本章では、なおアダム・スミスのこの問題に関する見解について簡単に考察しておくことにする。

すでにみたように、トウークは、商人と商人とのあいだの流通と商人の消費者とのあいだの流通との区別についてのスミスのあやまった見解をうけついで、これを流通手段と資本とのあやまった区別に転化しているのであるが、スミス自身もこの問題を銀行の役割との関連で扱っているのであり、しかもスミスがそこで論じているのは事実上、銀行による流通手段の前貸と資本の前貸との区別の問題だと考えられるのである。スミスのこの問題に関する見解はきわめて興味のあるものだと思われるので、ここで簡単に考察しておくことにしよう。

スミスはこの問題を、『国富論』第二篇第二章、貨幣流通および信用制度が考察されている章で論じている。彼はこの章の前半で、流通手段として流通すべき金銀は、それがひとつの価値物、すなわち労働生産物であるかぎり、社会的空費にはかならないことについてのべ、この社会的空費は金・銀のかわりに紙券が流通することによって節約される<sup>(22)</sup>と主張している。

(22) スミスはこの論証にさいして、種々の混乱におちいつているのであるが、そのことは当面の問題とは無関係であるからふれないこととする。

スミスは、これにつづいて、このような節約は銀行が紙券を発行することによってもっともうまく達成されると主

張し、銀行券は銀行の貸付けによって発行されること、流通に必要な貨幣額がこのような銀行券による前貸によって供給されるならば、従来流通に必要とされた金・銀は流通から解放され、たとえば外国へおくられ、それだけの商品と交換することができることについてのべている。

彼は、銀行券流通による流通空費の節約の意味について論じたのち、とくにスコットランドで銀行券の流通が一般化したこと、銀行券は通常手形の割引によって発行せられること、しかしスコットランドの銀行では、手形の割引のみでなくキャッシュ・アカウントの制度が発明され、これが銀行券の発行を容易にしていること、等について説明をおこない、さらに「流通する紙幣の総額は、それがない場合に必要とされるであろう金・銀貨の額をけつてこえることができない」（『国富論』キャナン版二七八頁、邦訳岩波文庫版二七八頁、——以下の引用文においてはキャナン版の頁数のみを記する）ことについてのべ、かりにこの限度をこえて紙幣が流通するならば、それは兌換請求によって銀行に復帰すると主張し、さらに、発券銀行がつねに流通に必要なだけの銀行券を発行しているかぎりでは、けつして過剰発行のおそれはないがかならずしもそうでないためにしばしば過剰発行が生じたのだと、主張している。

ここであきらかなように、スミスは銀行を商品流通の媒介に必要な通貨の供給者としてのみとらえているのである。したがって、つぎに彼が考察せねばならぬのは、流通に必要な貨幣の供給者としての社会的役割をもっている銀行は、その個々の前貸をどのように規制するならば、このような社会的役割を満足させることができるか、という問題である。

これについて彼はつぎのようにのべる。

「ある銀行が、ある商人またはある種の企業家にどれほどの貸付をなすことが適當であるかといえ、それは、彼が

取引に用いる資本の全部でもなく、またその相当の部分でもなくして、ただそのうちの一部分、彼が貸付をうけない場合に彼の手許に不使用のままに、随時の請求に応じるための準備金として保有せねばならなかった部分にかぎられるべきである。銀行の貸付ける紙幣の額がこの価値をこえないならば、それは、その国に紙幣がなかったならばかならず流通するであろう金・銀の価値をこえることはけつしてありえない、それは、その国の流通界が容易に吸収し、使用しうる量をこえることはけつしてありえないのである」(同上二八七頁)。

ここでスミスは、銀行は、銀行が通貨の供給者としてあらわれない場合に商人自身が「随時の請求に応じるために手許に保有しなければならなかった準備金」の額を貸出すかぎりでは、銀行が流通に投じる紙幣の量は、もし紙幣がなかった場合に流通したであろう金・銀の量をこえることはありえない、と考えているのである。

(32) ここで「商人が貸付をうけない場合にその手許に使用のままに、随時の請求に応じるための準備金として保有せねばならなかった資本部分」とのべているものについて、スミスは、他の箇所でつぎのようにもいつている。「彼の資本のその他の部分をたえず使用しうるようにしておくために、彼の手元に不使用のまま現金として保有しなければならない資本部分」「ある期間内に、紙幣の形または鑄貨の形において、貨幣として各商人の手に復帰し、たえず同様の形において彼のところから出ていく部分」「彼が信用にもとづいて購入した財貨の代金支払のたえざる請求に応じるためにつねに用意しておかねばならぬ貨幣部分」

このスミスの見解はきわめて興味のあるものである。というのは彼はここでは、銀行が社会的な流通に必要とされる貨幣の供給者としてあらわれる以前には、再生産にたずさわる資本家自身が流通に必要な通貨をみずから追加的に前貸ししなければならないこと、したがって、銀行が通貨を前貸しする場合には、銀行はたんに資本家自身がおこなねばならなかった通貨の前貸を肩代りするにすぎないことに、事実上気付いているからである。

彼がここで「商人が貸付をうけない場合に、その手許に不使用のままに、随時の請求に応じるための準備金として保有せねばならなかった資本部分」とのべているのは、あきらかに、マルクスが『資本論』第二卷第三篇で説明している、流通手段の前貸の必要によって規定されている資本部分、すなわち流通の媒介に一定の空費が必要とされるかぎりで資本家が追加的に保有せねばならなかった、したがってまた流通が信用によって媒介されることによって節約されうる資本部分をさしているのだと考えられるであらう。

スミスは、銀行が流通に必要な貨幣を前貸しするにとどまると考えられるこのような前貸についてのべたのちに、この場合の前貸とそれをこえる前貸との間の区別についてつぎのようにのべている。

「一部は手形割引の便宜により一部はキャッシュ・アカウントの便宜によって、ある国の信用ある商人が、その資本の一部分を、随時の請求に応ずべき不使用の現金として保有する必要から免れることができたならば、彼等はそれ以上の銀行および銀行家からの援助を当然期待すべきはずはない。銀行もまたそれ自身の利益と安全とを損わずに、これ以上の援助をすすめることはできないのである。いかなる銀行もみずからの利益を損わずには、一人の商人にたいてはその營業用の運動資本の全部はもちろん、大部分をでも貸付けることは出来ない……商人その他の企業家は、うたがいもなく借金をもって彼等の計画の大部分を實行しておおいに成功することがある。しかしながら、債権者のために公平に考えるならば、この場合には、債務者自身の資本が債権者のそれをいわば保険するに充分なもの、いいかえれば、たとえその計画が計画者の予期にはなだしく反することがあっても、それがために債権者に損害を与えらるようなおそれが万々ないようなものでなければならぬ、かかる注意をもってすら、いやしくも借用する貨幣が数年の後でなければ償還することの出来ないような貨幣であるならば、これを銀行から借用すべきではない、そういう

貨幣は、みずからその資本を使う労をとることなくしてその貨幣の利子で生活しようとするような私人から、すなわち、その故にその資本を数年間放置しておいてもさしつかえのない位の信用ある人に貸したがっているような人々から、借用証書または抵当証書により借りるべきである」(『同上二九〇頁』)。

スミスは、ここでは、事実上、銀行の前貸における流通手段の前貸と資本の前貸との区別についてのことになる。ただ彼は、銀行をたんなる通貨の供給者としてのみ扱っているのであるから、銀行は前者の要求にのみ応じるべきであり、後者の要求には応える必要はない、と主張しているのである。

スミスがここで問題としている区別は、事実上、マルクスが『資本論』第三卷第五篇の三十三章で、社会的再生産の視点からあきらかにしている、流通手段の前貸と資本の前貸との区別に照応するものだ、と考えられるのではないだろうか。

スミスは、銀行——ここで問題とされているのはとくに発券銀行であるが——の機能を、社会的な通貨の供給者としてのみ扱えているのであり、銀行はその前貸を、流通の媒介に一定の空費が必要とされるかぎり、資本家自身が追加的に準備し、投下しなければならなかった貨幣資本部分に限定すべきだ、と主張しているのである。これにたいして、彼は、資本家が再生産過程に追加的に投下する資本を前貸することは、必要通貨の供給者としての銀行の役割にかんしては余計なことだと考え、このような前貸は、銀行によってではなく、自分の資本をみずからは使用しないでその利子で生活しようとする貨幣資本家によってなされるべきだと主張しているのである。

彼のこの区別の背後にはあきらかにつきのこと、すなわち、それ自体無価値な紙券は、たんなる流通用具としてのみ役立つのであり、それにもとずいてあらたな資本をつくりだすことはできないということが意識されている。



これまで考察してきたスミスの見解には、そこにさまざまな混乱があるのであるが、流通手段の前貸と資本の前貸との区別についての明白な問題意識がある。

ところでスミスは、この問題と関連して、種々の銀行の過剰信用の実例についてふれ、さらにイングランド銀行の歴史についてふれたのち、ふたたび銀行が通貨の供給者として果たす役割についての考察に立帰っている。

「銀行事業上のもっとも思慮ある活動が一国の産業の発達を促進するのは、それがその国の資本を増加させるからではなくして、そういう活動のない場合に比して、その資本の大部分を有効にして生産的に利用させることにある。

……ある国に流通する金・銀貨は、その国の土地および労働の生産物を年々流通させ、しかるべき消費者に分配する手段たるものであるが、それはまた、かの商人の手許準備金と同様にぜんぜん死せる財貨（デッド・ストック）である。しかるに銀行の思慮ある活動は、この金・銀の大部分のかわりに紙幣をおくことによって、この国をしてかかる死せる財貨の大部分を変じて有効にしてかつ生産的な財貨となすことを得せしめるのである」（同上二〇三頁）。

スミスは、これにつづいて、一国の流通貨幣の大部分が紙幣で充満されることの危険についてふれたのちトウクによって、流通手段と資本との区別として引用されている、商人相互間の流通と商人と消費者間の流通との区別についての説明をおこなっているのである。

「すべての国の流通は、これを二つの部分に、すなわち商人相互間の流通と商人と消費者間の流通に分けることができる。紙幣の場合でも金属貨幣の場合でも、おなじ貨幣が、あるときは前者の流通に用いられあるときは後者に用いられうるのではあるが、この両者はたえず同時にこなわれているものであるから、各々の流通はその実現にいずれかの種類の貨幣の一定在高を必要とするのである。そして商人間に流通する財貨の価値は商人と消費者との間に流

通する財貨の価値を超過しえない、というのは、商人の買うものは一切結局は消費者に売らるべきものだからである」(同上三〇五頁)。

そしてこれにつづいて、「紙幣の流通は、これを商人間の流通のみに限定することもできるし、商人と消費者間の流通に拡大することも出来る」が「紙幣が商人と商人との間の流通のみに局限せられても、銀行および銀行家は、紙幣が流通のほとんど全部をみだしていたときにおとらず。その国の産業および商業にたいして援助を与えうる」とのべている。

これまで、彼が論じてきた問題は、銀行券を発行する銀行は、一国の流通に必要とされる通貨の供給者として、どのようにその前貸を規制すべきか、という問題であつた、ところがここでは、銀行の果すべき役割が、とくに商人と商人とのあいだの流通に必要な貨幣の供給者としての役割に限定されているのであり、しかも、この場合にも、銀行は社会的におなじ役割をはたすことになる、と主張しているのである。

彼はこの理由について、つぎのように説明している。

「商人が随時の請求に応じるため、彼の手許に保有しなければならない準備金はまったく彼と彼が財貨を買う他の商人とのあいだの流通のためだけに予定されているのである。かれは、かれ自身とその顧客である消費者たちとのあいだの流通のために、その手もとにすこしも貨幣を保有する必要がないのであつて、消費者たちは、かれの手もとから現金をすこしももちさらぬどころか、かえつてそれをかれにもたらすのである」(同上三〇六一七頁)。

ここで彼が誤っていることはあきらかである。この場合彼は、労働者階級、あるいは地主階級が資本家から購買する貨幣もまた、本来資本家自身によって前貸しされたものだ、ということ、すなわち、社会的流通に必要なあらゆる

貨幣は、すべて資本家自身によつて前貸しされねばならぬ、ということに気づいていないように思われる。

ここで興味のあるのは、トゥークと同じようにスミスもまた、商人と商人との間の流通と商人と消費者との間の流通との区別を、銀行の通貨の供給者としての役割との関連で論じているのだということである。

ただ、トゥークの場合には、銀行は商人と消費者との間の流通に必要な貨幣を供給する場合にのみ、通貨の供給者としてあらわれるのだと考えているのに、トゥークが自分の主張の根拠として引用しているスミスの場合には、逆に、流通に必要な貨幣の供給者としての銀行は、商人と商人との間の流通に必要な貨幣を供給すればいいのだと考えていることになる。

問題は、なぜスミスが流通に必要な貨幣の供給者としての銀行の役割について論じるさいに、商人と商人との間の流通と商人と消費者との間の流通との区別を持ちだすのかということであるが、彼のこのような混乱は、究極的には彼の  $v + m$  のドグマにもとづくものだと考えられる。

彼は  $v + m$  のドグマにもとづいて、「商人と商人との間で流通する商品の価値は商人と消費者との間で流通する商品の価値をこえることはできない」と主張しているのであるが、これは、年々の流通は、結局は、商人と消費者との間の流通に解消するはずだ、という意味にはかならない。したがって、彼は、このかぎりでは、収入の支出に必要とされる貨幣は全商品の流通のためにも充分だ、と考えていることになる。

したがって彼は、一国の流通は、そのときときには、相並んでおこなわれる二つの部分に分けることができ、その各々の流通は、それぞれ一定量の貨幣を必要とするのであるが、結局一方は他方に解消するのであるから、銀行はいずれか一方の分野で必要とされる貨幣のみを供給するだけで充分なはずだ、と考えるのではないだろうか。

以上簡単に考察したように、スミスにあつても彼が本来問題としているのは、銀行による流通手段の前貸と資本の前貸との区別である、彼は銀行の役割を、金・銀のかわりに銀行券をもって流通の必要をみたすことだと考えているのであるから、銀行は流通の必要にもとづく貨幣需要にこたえればよいのであつて、資本前貸にたいする需要にはこたえる必要はない、と考へているのであり、資本の前貸は銀行にではなく、資本をもつていてもみずからは投下しない貨幣資本家にもとめられるべきだと主張しているのである。しかしスミスは、流通手段の前貸と資本の前貸との区別について、一応正当な問題提起をおこなひながらも、結局は混乱におちいらざるをえない。というのは、なによりも、彼は社会的再生産についての根本的に誤つた見解をもつていたのであり、社会的再生産を媒介する貨幣流通についてもまったく誤つた理解しかできないからである。

マルクスは『資本論』第二巻第三篇で社会的再生産についての分析をおこなうさいに、とくにスミスの  $v+m$  のドグマの批判を念頭においているのであるから、そこで  $v+m$  のドグマを批判することにより、同時に、社会的再生産を媒介するものとしての貨幣の運動に関する彼の誤りが批判され、そのことによつてまた、流通手段の前貸の問題についての明確な解決があたえられているのだとも考えられるのではないだろうか。<sup>(24)</sup>

(24) 二巻三篇では貨幣流通に関するスミスの誤りが批判されているのであるが、他面マルクスが、『国富論』第二篇第三章の信用貨幣についての分析をたかく評価していることは、たとえばつぎの文章に示されている。

「重商主義の妄想にたいする論争に熱中したために、アダム・スミスは金属流通の諸現象を客観的に理解するのを妨げられたのであるが、他方、信用貨幣にかんする彼の見解は独創的で深遠なものである」(『経済学批判』全集版一四三頁、邦訳国  
民文庫版二二三頁)。

## あとがき

この小論は、マルクスが『資本論』の諸所でおこなっている流通手段の前貸と資本の前貸との区別にかんする諸分析を体系的に理解しようという意図でかいたものである。したがって、この小論の内容はもっぱら、流通手段と資本との区別についての『資本論』の叙述についての解釈にあてられている。しかし、マルクスがこの問題についてふれているのは、わたくしが本篇でとりあげた部分だけではない。たとえば、『資本論』第三卷第五篇において、その他の諸問題を考察するさいにも、マルクスはおりにふれてこの問題に關説しているのである。本稿でわたくしがのべたような視点でこれらの箇所を一貫して解釈できるかどうかについては、なお疑問の余地がないわけではない。

さらにこの問題についてのマルクスの見解を充分に知るためには、『資本論』一・二・三卷にわたる、とくに貨幣流通にかんする諸分析の体系的な考察が必要となる。

とくに、第二卷第三篇での分析においては、商品流通が年末に一挙におこなわれるものと想定されているのであるから、そこであきらかとされている流通手段の前貸と資本の前貸との区別が、個別的資本の運動においてどのようにあらわれるかという問題は、第二卷第三篇での分析を念頭においたうえで、第二卷一・二篇の詳細な考察を必要とするのであり、そのうえでの、商品流通と資本流通との関連についての正確な理解を必要とする。

これらの問題についても、この小論では、充分な考案をしているとはいえない。

以上のように、おおくの未解決の問題をのこしたまま、この小論を発表するのは、流通手段の前貸と資本の前貸との区別の問題は、その重要さのわりに従来あまり問題とされていなかったのではないかと考えたからであり、またそ

のかぎりでは、この小論を発表することはひとつの問題提起としての意味をもちうるのではないかと考えたためである。

なお、この小論で当然解決しておくべきであったにもかかわらず、未解決のまま残してきた一つの問題について簡単にふれておくことにしよう。

それは、本稿第一章で考察した、第三卷三十三章の例の一節についての問題である。

すでにみたように、そこでマルクスは「流通手段の支出と資本の前貸との区別は、現実の再生産過程をみればもつともよくわかる。生産上の種々の成分がいかにして交換されあうかは、さきに（第二卷第三篇）われわれのみたところである」とのべている。

ここでマルクスが「すでにわれわれのみたところである」として指示しているのは、その内容からいつて、当然に『資本論』第二卷第三篇のことだと考えられるであろう。これについてエンゲルスもまた、（第二卷第三篇）と明瞭に指示している。エンゲルスは、この一節の後半では、さらに、第二卷第二十章（第五節）を参照するように指示しているのである。ところが、『資本論』の原稿の執筆の時期からみると、第三卷の原稿が書かれたのは、大体一八六四年—五年であり、第二卷、とくにその第三篇の原稿がかかれたのは、一八七〇年以後である。<sup>(25)</sup>

(25) 両者が書かれた時期については、エンゲルスの第二卷への序言および第三卷への序言によって知ることができるのであるが、それによると、第三卷の三十三章は一八六四—五年執筆の原稿（なかでもそのうちの『混乱』と題する部分）から編成されたものであること、また第二卷第三篇は一八七〇年にかかれた第二稿、および「著者の拡大した視野に照応するように」書きかえられた第八稿から編成されたものであることがわかる。

したがって、第三卷三十三章で第二卷第三篇が指示されているのはどうしたわけか、ということが当然疑問の種と

なる。

もつとも括弧内の指示は、おそらくエンゲルスが挿入したものだと考えられるのであり、エンゲルスは、とくに現行『資本論』の内容からみて、第三巻第五篇を指示しているのだ、とも考えられる。しかし、そこではマルクス自身「生産上の種々の成分がいかにして文換されあうかは、さきにわれわれのみたところである」とのべているのであるから、ここでマルクスが指しているのはどこかが、やはり問題とされねばならない。

これについての可能な解決は、第三篇三十三章を書いた一八六四・五年頃に、マルクスはすでに一八七〇年以後に書かれた第二巻第三篇の内容についての具体的な構想をもっていたと考えるか、あるいは、ここでマルクスが指示しているのは、第二巻第三篇ではなく、他の箇所だと考えるか、のどちらかであろう。もしこれが第二巻第三篇を指しているものではないとすれば、『資本論』のうちにはほかに該当する箇所はないのだから、『剰余価値学説史』のうちのケネーの経済表について論じている部分だということになる。

いずれにしても、この一節について考察する場合、本来ならこれらの問題をさきに解決せねばならないにもかかわらず、本稿第一章ではこれらの問題にふれずに、そこでマルクスが指示しているのは第二巻第三篇だとして考察をすすめてきた。というのは、これらの問題については、じつはわたくし自身どう考えるべきかについての明確な結論に達していないのであって、この問題を解決したのちに例の一節について考察することになると執筆がはじめから行き詰らざるを得なかったからである。また、いずれにしても例の一節におけるマルクスの説明は、その内容からいって、エンゲルスが指示しているように第二巻第三篇を指しているものとしてよいと考えたためである。

(完)